

【コラム7】 問われる空間

猿山隆子（京都大学）

人が「語る」ということは、「語る場」と切り離せないのではないのでしょうか。大学院生が主体となって調査研究活動を行う課題探求・討論科目である研究開発コロキウムで、京都府相楽郡南山城村野殿・童仙房地域をフィールドに、地域の方々に聞き取り調査を行いました。そのひとつとして「農村の女性の暮らし」をテーマに、農業を営むAさん家族に日々の生活や農作業について話をうかがいました。インタビューは、Aさん宅の土間にある応接セットのテーブルをはさんで、向かい合わせに座って始まりました。その途中で、家で食べる野菜はすべて賄っているという畑を見せていただくことにしました。すると、土間から畑へと場所を移動したことで、AさんとBさんの語り方やその内容が変化したことに気づきました。土間でのインタビューでは、畑作業を通じて童仙房の野菜や風土について語る傾向にあったのに対し、畑で野菜を収穫しながらの会話では、畑作業に関してより具体的で、個人の生活に密着した内容となりました。季節毎の一連の作業の手順やその時の状況などの農作業のこと、それぞれの野菜の美味しい食べ方、そして、料理にまつわる昔の思い出まで話は拡がっていきました。そこには、色鮮やかな野菜を目の前にして、引き出されるように話題がどんどん変わり、より具体的で、生き生きとした会話の展開がありました。調整された時間内で、聞き手が「質問し」、語り手が「答える」という会話の形であった土間でのインタビューが人工的な場であることを知らされます。

それでは、Aさん家族にとって、畑という空間はどのような場なのでしょう。この畑は、現在、Aさんのお姑さんであるBさんが主に野菜の世話をしており、Bさんは30年ほど前にお姑さんから引き継いだものです。畑作業が「毎日の楽しみ」というBさんの語りからは、野菜を育てることの楽しさを味わう場としての意味をもつ空間と捉えることができます。嫁いですぐに料理を教わり、畑の野菜で食事を作ってきたAさんの畑作業や野菜の話からは、台所を預かり、日常の食卓を潤すための場としての意味をもつ空間と捉えることができます。この畑は、毎日食べる野菜を育てる場というだけでなく、畑に関わる人それぞれの意味を持つ場であることが分かります。また、AさんとBさんは畑という空間を分有し、それぞれの世代の役割を担い、引き継いできたことがうかがえます。そこから、世代にともなう家族間での役割によって空間の意味が変わってくると考えることができます。

こうしてみると、「どこで語るのか」ということは、「何を語るのか」、「どのように語るのか」に作用するといえるのではないのでしょうか。聞き取り調査をする上で、話をうかがう場所は、語り手の意向が最優先されなければなりません。その上で、聞き手である私た

ちは、地域の人びとのより生き生きとした生活を捉え、理解していくために、「語る場」を選定し、語り手にとってその空間の意味を意識して話を聞く必要があると実感しました。